バイオハザード　生物兵器の彼女は何を思うのか

コーちゃん元帥

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイラントの突然変異個体の彼女は何を思うのか？

様々な交流が彼女を一つの『個』へと徐々に変わる物語です。

目次

誕生　F―101 ―― 1
フェアリー観察日記 ―― 4
実験 ―― 7
初任務終了 ―― 12
姉妹達 ―― 19
単独任務セカンド ―― 24
妹達と社会潜伏実験1 ―― 30
妹達と社会潜伏実験2 ―― 36
ファイブ&シックス ―― 41
社会潜伏実験3 ―― 45
社会潜伏実験4 ―― 49
ファイブ&シックス　U・B・C・Sで任務 ―― 55
ファイブ&シックス　欲望渦巻く中で ―― 60
ファイブ&シックス　欲望渦巻く中で2 ―― 68

誕生　Ｆ―１０１

とある研究施設、様々な機器がありパイプやコードが散乱してる。
とっても広い為（東京ドームの４分の１）どれだけの機材があるか職員でなければ理解出来ないだろう
その部屋にある唯一の道を四人の男が中心に向かって歩いていた。
いかにもな研究員が二人そして白い頑丈そうなコートを着た二メートルは越えてるであろうスキンヘッドの大男、そして軍服を着た男達は中心にある一つの培養液に満たされたカプセルを見る。
「これが突然変異したＴ―１０３かね？」
「はい、どういう訳か性別が変わって現在、データを収集しておりますが何故か覚醒させるプログラムが作動せず四苦八苦してる状況です」研究員が言う変異体はカプセルの中にいる銀髪の幼い少女のことだ。
「ふむ」と軍服の男は手に持ったブーメラン状のナイフで自身の舌を傷付けながら何かを考えそしてカプセルに更に近づいた。
興味深く眺めそしてコンコンッとカプセルを軽く叩いた。
研究員はいったい何を考えているのか？と思っていた矢先に初めての変化が表れた。
一瞬、指がピクンッと動いた。
研究員は錯覚かと思い見つめるとピクンッピクンッと確かに動いていた。
片方の研究員はあわててもう片方おそらく部下である研究員に指示を出した。
「急いで覚醒プログラムを作動させろ！それと共にスタッフを緊急召集だ！女性型Ｔ―１０３が動いてるぞ！」研究員の慌てようは仕方ないことだろう
突然変異してから３ヶ月まともに覚醒すらしなかったのが突然、動き出したのだから部下もことの重大性を理解しており大急ぎで機材に取り付けられた連絡用の機器を使い何度も何度も復唱しながら上司からの指示を実行するのであった。

それから１０分もしないうちに大勢の様々なスタッフが集まった。
念のため防護服を着ている。
「覚醒プログラム実行……正常に作動しました！」
「続いて培養液を排出します」プログラムが正常に作動し続いて培養液を抜いて少女は床に横たわった。
そしてカプセルが外された。
防護服の研究員は恐る恐る近づくそうすると足音にピクンッとＴ―１０３が反応した。
誰もが予測不能な為に近づくのを躊躇った時、軍服の男が堂々と近づいた。
「？」そうするとＴ―１０３が眼を覚ました。
咳払いをしながらゆっくりと身体を起こし周りをキョロキョロと眺め始めた。
「やあ、目覚めの気分はどうかな？」まるで祝福するかのように両手を広げて言葉を投げ掛けた。
「め……ざめ？……きぶん……うか？」
「しゃ、喋った！喋ったぞ！」研究員が驚くのは無理もないタイラントシリーズは唸り声など出すが片言でも喋った事例はなかった。
「しゃべた？したぞ？」まだ聞き取る機能が働いていないのか分からないが次々と周りで使われた言葉を真似しだした。
それを興味深く観察していた軍服の男はやがて研究員の中でも担当をしていた責任者にこう告げた。
「おもしろい、とりあえずデータを取れ、結果次第では追加予算も出す。言ってる意味……分かるな？」出来なければ責任者はそこまでだと言う話だが逆に言い換えればそれだけ興味を持ち尚且つ期待もされてるという意味でもある。
だからこそ責任者は興奮の色を隠せずいや隠そうともせずに勢い

よく頷いた。
他の研究員もそうだ。
今まで四苦八苦していた変異体が価値のある存在だと理解しやる気も出るもんだ。
なんだかんだ言って責任者は成果を独り占めにしない人間だと理解されてるからこその研究員のやる気だ。
「それと今後、この個体をＴ―１０３から名称を変える。その容姿を讃えフェアリー……その頭文字からＦ―１０１に変える。良いな？」やけに気分が良いのか？軍服の男から名称まで授かり更にこの個体の価値が跳ね上がったように感じた。
それほど目の前の人物の地位は高いことを示している。
研究チーム一同がこれ程、良い返事をしたことがあったか？と思うほどやる気に満ちていた。

フェアリー観察日記

とある研究員の日記

１０月７日

１０月１日にＦ―１０１が目覚めてから早くも一週間になるが知能に関しては素晴らしいの一言にしか過ぎない！

Ｆ―１０１は教育官からの教えを忠実に守り知識を吸収し今では言葉の意味を理解し会話が成り立っている！

後々分かったことだがどうやら何らかの誤作動で事前にインプットされていたプログラムが白紙になっていたことが分かった。

おそらくこれが原因で覚醒プログラムも作動しなかったのだろうだがそれが今ではプラスに働いていると考えると幸運だ。

少しすれば性能テストも出来るだろう

１０月２６日

待ちに待った性能テストの時が来た。

Ｆ―１０１にプログラムではなく学習させることで命令が実行されるのは計算外だが特殊部隊員による近接訓練にて事前に体術を会得させた。

吸収する速度は恐ろしいの一言に尽きる。

僅か３日で身につけた。

Ｂ．Ｏ．Ｗでも極めて完成度が高いハンターを相手にさせたが結果は一瞬だった。

ハンターが襲い掛かったがこれを難なく避け殴るだけで頭部が原形を無くし倒れた。

あまりにも一瞬であった為にハンターを日に日に増やしていった

が驚くことに計１１体までなら無傷で勝てることが証明された。
それと同時に体術がより洗練されこの時点でＴ―１０３を越えてると確信した！
所長はこれを報告して追加予算を確保するつもりらしい

１１月１９日
Ｆ―１０１の成果を報告したところなんと追加予算は今の２倍もらえたそうだ！
そして所長が考えた極限の実験、そうタイラントだ。
たしか型式はＴ―０７８だったか？特殊部隊の訓練相手用のタイラントで最初から肉体のリミッターが外されているタイプだ。
それにＦ―１０１を戦わせようとしてる。
万が一に備え訓練用タイラントには爆弾を内臓させた為にそうそうないと思うがその前に最終確認も含めてあと一回だけハンターと戦わせるようだ。

１１月２４日
ハンター１２体と戦わせてみたがやはり苦戦するようだ。
多少の傷を受けるが再生能力が従来のタイラントを上回る速度であった。
それと一度、片腕が斬り飛ばされた時には冷や汗物だったが斬られた腕をくっつけてしまった。
そしてこれによって欠点が見つかった。
どうやら従来のタイラントよりも皮膚の強度が弱いのだ。
今まで傷付くことなどなかったから分からなかった。
これでは拳銃ならまだしももう少し火力が高い携行火器を使われたら倒されてしまうが問題はすぐに解決した。
Ｔ―１０３にも使われている防弾対爆仕様のコートをＦ―１０１

に合わせて作らせた。
職員の誰かがクリスマスを教えたらしくクリスマスプレゼントと称して専用のコートが渡された。
この時からかF―101が少しだけ笑うようになったのは……

12月9日
あと3日すればタイラントとの性能比較のテストが行われるがその間にもF―101の成長速度は凄まじい！
あれからデータ収集を行っていたがなんと複雑な筈の火器を扱えるのだ。
偶然だがしかし別の研究所が開発してるT―103をベースに寄生型ネメシスを寄生させることで複雑な命令を可能にしてるらしいがF―101はそれを上回る結果を出した。
タイラント由来の膂力も合わさって重火器すらも軽々と扱いタイラントよりも機動性がある。
急ぎ開発スタッフを集め各武器に対応可能な専用のコート及び武装の開発に着手した。
これは性能比較テストが楽しみだ。

実験

今日も真っ白な部屋から始まる。
ルールシアから貰ったクリスマスプレゼントを常に着て待機してる。
今日もハンターと遊ぶのかな？
それとも勉強なのかな？
どっちもやりたくって身体が落ち着かないと言うらしい
最近は［知恵の輪］を壊さないように外すのが楽しい
もちろん本や勉強も楽しい
引き金を引くと大きな音を出すおもちゃも楽しい
ご飯も楽しい
カチャカチャといじってるといつも通り扉が開いた。
「来いＦ―１０１、いつもの遊びだ」とこれでなん度目になるか担当とやらの人……ハンバレンストが迎えに来た。
部屋を出て他の人とすれ違う
おはよう、元気か？大丈夫か？と色々なあいさつと言う言葉を学んだ。
意味はあまり分からない
でも朝はおはようが正しいと判断
元気か？は分からない、大丈夫か？は身体に異常があるかだと判断した。
身体に関してはオールグリーン遊ぶことに支障なし
そして今日はなんか広いって所に来た。
「今日もハンターと遊ぶ？」
「違うな今日の遊び相手は……あいつだ」ハンバレストが指を指した先には最初に自分が入っていたんだと教えてくれたカプセルに似たのにみんなより大きな奴が入っていた。
「あれはＴ―０７８訓練用タイラントだ。ハンターよりも遊びがいがあるぞ」

「ハンターよりも遊びがい？」
「おおっと難しかったか、なぁにハンターより面白く遊べるぞ」面白くは分かっていた。
楽しいことがあると教えてもらった。
自然とにやついてしまう
「おお、分かったか？では頑張りたまえ」とハンバレストが広いって所からいなくなると最初だけキィンとする音がするのから声が聞こえた。
『ではＦ―１０１、遊びを始めるぞ……ああそれとそれに勝てたら新しいおもちゃをあげるから頑張るように』とカプセルからバチャバチャと水が流れてＴ―０７８の心臓が動き出す。
タイラントが次第に覚醒するとＦ―１０１を見据える。
「ハンターより元気そうってやつ……楽しそう」それに新しいおもちゃが欲しい……早く遊びたい
タイラントは雄叫びをあげるとまっすぐ突進し常人なら即死は免れない凶悪な爪を振り下ろしてくる。
だが大振りなんてＦ―１０１からすればハンターと同じように遊んでる感覚でしかなかった。
「元気だね」活きの良い遊び相手だと分かると興奮する。
「お返し」と無防備は腕の関節を殴ると簡単に折れた。
だがハンターとは違い骨が折れただけで千切れたりすることはなかったことから余計に楽しくなってきた。
タイラントは怒っているのか大振りの攻撃を繰り返すが当たることはなく
なんとも呆気なく長々遊んで早くも一時間になるがＦ―１０１に傷一つ付かず余裕で勝利した。
タイラントはもはや機能停止に近い
『よくやった。ご褒美として新しいおもちゃでそいつともう少し遊んでやれ』とゲートの一部が開き巨大な銃器が置かれていた。
これはタイラントの中でも追跡者の名称を付けられたネメシスが装備していたマシンガンの改良型だ。

Ｆ―１０１は喜んでおもちゃを使いそして至近距離から掃射、弾を使いきる頃にはタイラントはミンチになっていた。
『よし今日の遊びは終わりだ。このあとは勉強だぞ』
（やった！勉強だ）おもちゃを片付けてお勉強部屋に移動した。

その日、研究員達は会議にてＦ―１０１の今後の方針を決めていたが本部からある依頼が来ていた。
「バイオハザードが発生した研究施設から研究データ及びウイルスサンプルの回収かぁ」
「だが現状、Ｆ―１０１に出来るのか？」
「覚えが良いからな、あらかた電子機器の扱いも覚えた。そして過酷な環境だから知能を含めたテストとして最適だとでも思ったんじゃないですか？」基本的な軍事行動ならもう覚えてる。
電子機器の扱いもわけなく行える。
「戦闘能力に関しては文句はないだろ、訓練用とはいえタイラント型を余裕で倒したんだからな」
「なら私達でバックアップすれば問題はないでしょ？」予算だって今回の結果を提出すれば増やしてくれる約束であり、そうでなくても潤沢な予算があるので万全なバックアップは出来る。
「そうだな……成果はこの短期間で上々、あとは実戦でのデータを採るのが良いだろう」あの幹部養成機関があるあの洋館でもタイラント型の試験をしてる話だしな……まあ一度閉鎖してからの再利用らしいが……
「ではＦ―１０１に準備させるがもういい加減ナンバーでは呼びづらいのでコードネームを決めようと思うんだが何かないか？」と一人の女性が答えた。

「安直だけどピクシーで良いんじゃないかしら？幹部からフェアリーの頭文字を型番にするぐらいだし」とみんなもそれに納得した。
「今回、成功すれば量産計画も実行に移せるだろう、各員準備を始めろ」と研究員は各々準備しだしたのであった。

そして４日後……
ある研究施設の隠し通路の付近に複数のヘリが着陸する。
研究員達はまさかあの『死神』が指揮する部隊、アンブレラの特殊部隊『Ｕ．Ｓ．Ｓ』のアルファチームに所属する死神ハンクとその隊員達、一個小隊が同行することになるとは……
「いいかピクシー、あの軍人と一緒に仕事をして来るんだ。言う通りにすれば失敗なんてないさ」
「了解」と仕事を理解させているために普段の陽気さはなくなり冷徹なマシーンになっていた。
作戦内容も理解しており単独での行動及び組織的行動が可能かのテスト、研究データとウイルスサンプルの回収の援護だ。
そこに一人の隊員が近づいてくる。
「アルファチームのハンクだ。そいつが例のタイラントか？」ガスマスク越しでも感情を感じさせないがそれがハンクだ。
「ああ、この子がそうだ。コードネームは『ピクシー』だ」
「報告には聞いていたが……役に経つのか？」

「それは保証する。戦闘能力に関しては文句ない、あとはこの実戦等から採れるデータを待つばかりだ」
今回のピクシーの装備
・防刃防弾耐熱型特殊コート
・ＢＯＷ用銃器（ハンドガン、マシンガン）
・電子端末
・軍用装備一式
・高カロリー栄養補充用飲料
「どうだ？使えそうか」
「使える。問題なし」そりゃそうだ。
さんざん遊んだおもちゃだからだ。
「よしならピクシー……行ってこい」それからしばらくして搬入用のエレベーターで降りた。

初任務終了

研究施設に突入してから小一時間、アンブレラの特殊部隊『Ｕ．Ｓ．Ｓ』のアルファチームはあるトラブルが発生していた。

研究施設の中層フロアに到達したときに警備システムが誤作動、更にどこからかガス漏れしていたのか電線のスパークで引火、それによって部隊が分断されてしまったのだ。

「そちらの状況は分かった。別ルートで最深部を目指せ……こちらの心配はするな、お互い任務を果たせ、ｏｖｅｒ」ハンクは通信を切り自身達の状況を再確認する。

隊員が２名、いずれも負傷なし

「ハンクよりピクシーへ、応答せよ」先程の話ではピクシーは現在単独であった。

『こちらピクシー……状況確認』

「よし状況を説明せよ」ハンクとしては内心、タイラント型でなくて良かったと思った。

そして常人離れした身体能力を持ちながら意志疎通しての作戦行動が出来るのは現場としてはメリットが大きかった。

『現在、最深部に移動中……でも問題発生……謎の武装集団を確認、装備及び部隊章から米国の恐らく特殊部隊と推測……指示を乞う』特殊部隊は想定外だ。

だがその疑問も直ぐに無くなる。

「ならば排除しろ、一人も逃がすな」

『了解、これより戦闘に入ります。ｏｖｅｒ』

「よし、わたし達も行くぞ」ゾンビを倒しながら任務達成の為に動くのであった。

「装備確認……大丈夫……排除行動開始」と3階相当の高さはある所から飛び降りそしてＢＯＷ用ハンドガン……だがそれはライフル弾を打ち出す大型拳銃である。
むろん常人ではまともに扱えない
動体視力などが格段に向上してるピクシーにとっては歩く軍人などあくびが出るほど退屈な的でしかなかった。
装填数6発の弾丸は全て軍人の頭部に命中し見るも無惨な状態になった。
「てっ……敵だ!」と残りの軍人が着地したピクシーを撃とうとするがＢＯＷ用マシンガンを即座に掃射され戦闘開始僅か3分足らずで特殊部隊が壊滅した。
「弱い……」素直な感想だ。
これならハンターやタイラントと遊んだ方が楽しかった。
生存してるか確認してから使えそうな手榴弾など拝借しハンクに報告しようとした時だった。
「そこのお前!動くな!」増援か?ともかく動きを止める。
「銃を置いて手を後ろに!」と言う通りにする……とでも思うか?
相手を騙す演技やいたずらなどなぜか積極的に教えてくれる人がいたので思い付いたのは……
手榴弾を銃弾で起爆することだ。
死体に括り付いてる手榴弾を即座に撃ち抜く、むろん撃たれるがこの特殊コートなら防げるのでそこから反撃する。
ＢＯＷ用マシンガンを掃射しながらタイラント由来の跳躍で三階の連絡通路に戻りそして敵の通路を手榴弾やハンドガンで壊す。
電子盤を破壊し更に開けるのが困難なように手榴弾で扉等をひ

しゃげさせて脱出不能にする。
そして敵は6人……だがダクトから聞き慣れた音が響く鉄をひっかく音に四足歩行特有の音、それがダクトの出入口から大量に現れた。
全身の筋肉が剥き出しになっており頭蓋骨を突き破った大きな脳みそそして長い舌に鉄すら安易に切り裂くであろう巨大な爪、感染者が十分な栄養を摂取出来た場合のみ変異する『リッカー』だ。
耐久力も高く聴覚が発達してる。
これはチャンスだと判断した。
少なくとも十数体はいるのだ。
側にある適当なガラクタを下にいる生き残りに投げる。
そうすると音が盛大に響きリッカーは音の方にそして迎撃するために撃つ軍人に群がるのである。
自身は何もしない
ただ静かに去るのであった。
蹂躙されてるであろう軍人の叫び声が響き渡るエリアから……

「こちらピクシー、敵勢力の全滅を確認……指示を乞う」
『こちらハンク、司令部の指示に従え』とチャンネルを変えると司令部に繋がる。
『ピクシー、聞こえるかね?』
「聞こえます」
『いま君がいるのは中層エリアそれの西側になる。中央エレベーターを目指しそれから最下層に降りろ、そうすればいずれは合流も出来る筈だ』どうやら上層から下層までの3層に東と西で別れた計6エリアあるそうだ。
「了解……直ちに向かいます」とゾンビを蹴散らしながら小休憩も挟み栄養補給もしながら進む、ロックのかかった扉も基本的には力ずくでこじ開け進む
そして着いたは良いが問題がまた発生した。

中央エレベーターが動いていない。が、もう片方の壊れた非常用エレベーターに目がいく
ケーブルが途中で途切れているがハシゴやいやピクシーなら跳躍を駆使すれば難なく降りれる。
『仕方ない、やってみたまえ』と指示を受け、中の骨組みを利用しながらピクシーは軽快に降りていく
そして落ちていたエレベーターの天井をぶち破り到着する。
『流石だな、そのままデータベースを保管する保管所に向かえ』
いく先々ゾンビやリッカーなどいるがピクシーにとってはただの栄養源なので問題はなかった。
そして行く途中だがある部屋を見つけた。
ＢＯＷを保管してる実験室だが目的はその先なので入る。
「保管所……データベース……確認……」電子機器の扱いも教わり慣れた手際で打ち込みそして持ってきた記録デバイスに全データを記録させた。
「司令部、データの回収完了、脱出路のナビゲーションをお願いします」
『よろしい、ならばセキュリティールームに向かえそこにアルファチームが待機してる』と早速ナビゲーションに従い、行動する為の不安要素を排除に移る。
先のＢＯＷを保管してる実験室だ。
デバイスを操作して培養液に浸かってるカプセルのロックを厳重に書き直す。
これでちょっとしたことで誤作動もないだろう
そしてまた苦もなく進んで行く
一定の技能に加えて戦闘能力や判断力、十分なバックアップがある。
順調に進むが途中でゾンビとは違うと判断出来る存在を目撃した。
「生存者?」確定ではないので何となく呟いた。
そうしたら物陰から勢いよく白衣の男が現れた。
「う、撃たないでくれ！生存者だ!!」と白衣は血まみれだが怪我とか

はしてない
『どうした？何か問題でも？』
「生存者を確認、負傷なし、指示を乞う」
『空気感染の恐れがある。処分しろ』下された命令は非情であった。
だがなんの気まぐれか？ピクシーは命令にない質問をした。
「白衣の人、主任？それとも部下？」
「え？……いや確かに私はこの研究所の主任だが……」
「ならこのデータ以外に重要なデータの有無を聞きたい」と入手したデータを主任とやらに見せる。
「さすがアンブレラと言った所か……だが待ってくれ、怪我もしてないし抗ウイルス剤もきちんと射ってる。……私が持っているそのデータには無いこの端末から独立してるデータ、これと引き換えに保護してほしい頼む！」となんで聞いたのかピクシー自身でも不思議に思ったが主任は入手したデータ以外のデータを持っていた。
だがそこまでだった。
ピクシーが認識した命令は主任を処分それだけ、無慈悲に引き金は引かれ主任は声を出すこともなく死んだ。
そしてデータを回収する。
『ほう、いったい何をと思ったが見事だ。引き続き任務を果たせ』
ピクシーは人の形をしていても兵器である。
関係ないのだ。
そしてセキュリティールームにたどり着くとハンクがいたがすぐに違和感に気付く
出撃前と現在の人数が違う、減ってる。
「人数が違う……なんで？」ハンクと他数名しかいない
「任務遂行中に死んだ。それだけだ」どうやら簡単な理由だった。
「これ、データ、任務、目標」とハンクに手渡す。
彼に持たせた方が確率が高いと判断したからだ。
「よし、脱出経路を確認する。この先に搬入するための列車に乗り脱出する」無事の有無も先行した部下が確認済みらしくあとは合流するだけだった。

そして難なく合流した時、最後のイレギュラーが起きた。
搬入場に着いた。
「自爆システムを作動させろ」遠隔操作なのか隊員がデバイスで起動させる。
《自爆装置の作動を確認、爆発まであと１０分……繰り返します……至急研究員は待避してください》そのアナウンスが鳴った時である。
天井を突き破り1体の怪物が降りてきたのである。
ピクシーにとっては兄妹にもなる生物兵器……
「タイラントを確認しました」と誰よりも早くピクシーはＢＯＷ用マシンガンを撃ち込む
仮にもｔｙｐｅネメシス用の武器なのでそれなりに有効であった。
それを見たハンクは冷静に指示を出し列車を発車させるがタイラントも一筋縄ではいかない
マシンガンで怯んでいるとはいえ強引に進んでくる。
明らかに動き始めたばかりの列車では追い付かれる。
全員が撃ち込む中、ピクシーは周囲を確認する。
列車はこれだけ自身の足の速さでは脱出の時間に間に合わない
そうこうしてる間に追い付かれるが変に考える必要はなかった。
幸い2両目には自分しか居ないのだ。
即座に連結部を壊し先頭車両に乗り込みありったけの手榴弾など爆発物を車両の片方だけに投げ込んだ。
そうするとスピードが乗ってきた頃に片方の車輪等が盛大に壊れ横転しだした。
それでもタイラントは跳躍で飛び越えようとするが更に手榴弾がタイラントの目前に投げ込まれており
「これでおしまい」とピクシーの弾丸が手榴弾を正確に撃ち抜き爆発して盛大に転んだ。
もういかにタイラントでもこの車両に追い付けない
そして何もなく外に出たあとは合流地点まで歩き迎えの輸送ヘリが来た。

『よくやったピクシー、これで任務完了だ』呆気なく終わったように見えた。
けどＢＯＷとしてこれからも地獄へと降り立つのであろう

「どうやらまずまずの成果のようだな」
「ふむ最初はあんな少女など役に立つのか疑問ではあったがこれならフェアリー量産計画も承認していいだろう」
「違いない費用対効果は絶大だ。タイラントと並ぶこのアンブレラの傑作品になるだろう」
「なにせあの容姿だ。別の意味でも需要は高そうだがな……クククッ」
「では異議はないな……では承認する」

姉妹達

ある紛争地域の後方基地に近づく6人の人影があった。
「ゴブリンリーダーへ、こちらファースト、目標の基地を視認しました」
『こちらゴブリンリーダー、当初の予定通り武力制圧をしてください』
「了解、これより当基地を武力制圧します」F―101と呼ばれピクシー……そして様々な訓練と身分を偽りながらの傭兵生活、そして新しいコードネーム『ファースト』は後ろに控える5人に指示を出す。
よく見れば全員ファーストとそっくりの容姿をしてるがそれもその筈、彼女達5人はフェアリー量産計画にて量産された妹達、シスターズである。
まだファースト程ではないにしろ着実に学習してるので大雑把な命令なら理解し行動するだけの能力はある。
「シックスは狙撃、ファイブは工作活動して格納庫を爆破、サードとフォースは遊撃、私とセカンドは先に通信施設を破壊優先、その後援護しつつ殲滅に移行……全員、行動開始」と全員驚異的な身体能力で身の丈もあるBOW用特殊兵装を軽々と持ちながら移動を開始する。

「あー、退屈だな」
「まあいいじゃねぇか楽な仕事でよ」と基地の滑走路で話し込んでいた兵士達がいた。
彼らの言う通りこんな後ろの基地にわざわざ足を伸ばして来る敵もいないし前線で戦闘が続いてるなど信じられないほど平和であった。
「おっ?やっと帰って来やがったか」とパトロールに出ていたヘリコプターが帰ってきた。
「今度こそポーカーで巻き上げてやる!」
「またかよ。いい加減諦めろって」と笑いながら着陸しようと空中で止まった時であった。
パァン!とドでかい銃声が聴こえた。
なんだ?!と思う暇もなく空中でローターを破壊されて墜落した仲間のヘリコプターが最大限の警戒を施す!
「てっ……敵襲!」
「おいおいどこから撃って来やがっ……」と行動を開始しようとしたら複数箇所が爆発した。
それには通信施設や管制塔など重要箇所が爆破されていた。
「おいおい、通信アンテナがやられてんじゃねえか!」
「くそっ!管制塔が……応援が呼べねぇぞ!」
「格納庫もやられてる!」
「武器を構えろ!周辺警戒!」と流石に人も集まり部隊編成を終えて敵を探す。
集まれたのは僅か２０人足らずである。
「他に生き残りが居ると思うか?」
「分からん!だが生存者を探しそして脱出するしかない!」
「そうだな……よし兎に角、車両を探さねえとな……」と移動を開始した。
格納庫だからと全て破壊された訳ではない
先行した仲間がハンドサインでクリアと教えてくれる。

「無事なのはこの装甲車だけなんだが……最悪だ。タイヤ交換と電気機器がイカれてやがるから修理が必要だ」
「それなら俺に任せろ、どれどれ……これなら直せるが３０分は欲しい」
「なら生存者の有無を確認するぞ」
「おいおい、言い方が悪いがいると思うか？」
「だが戦友を見捨てることはできんそれに敵の正体をつかむ必要がある。幸いいつものメンツがいるしな探索及び通信を試みる」
「通信って通信塔もやられて出来るかよ？」
「予備なら生きてる可能性がある。あれは幸い非常用だから前線基地まで有線で繋がっているんだ。しかし普段は定期点検で出入りがあるぐらいだからあの周りに人がいるとは思えないがな」そしてやれやれ貧乏クジかよと仲間がわざとらしく言い６人が行動を開始した。
「地下通路クリア」
「各部屋もクリア」と着実に進む手際よく進むことが出来た。
だが途中から血痕や薬莢、銃弾の跡そして仲間の無様な死体だった。
「ガミル……お前に借りた金、返せなくてすまねぇ」
「チョッチュ……お前今度結婚するって死亡フラグ立てるから……」
「しかし、ひでぇ有り様だ。何にやられればこんなになるんだ」銃弾で殺られた訳でもなさそうだ。
事実、仲間は銃弾ではなく殴られそして絶命してる。
中には頭を粉砕されてる仲間もある。
だが人間にこんな芸当が出来るのか？
考えても答えは出ず仕方なく進む、そして少し広い場所に出た。
予備の通信機器があった場所だが……
「なんとなく予想していたが……」通信機器が壊されていた。
しかもまた何かに殴られてだ。
「仕方ない……引き帰そう、もう修理が終わってる筈だ」と引き帰した時、カラカランッと音が鳴る。

すぐさま警戒をするが何も起きなかった。
しかしそれが不気味さが増し急いで格納庫に戻った。
「やっと来たか……まあ言うな何があったのかはなんとなく察しがつく」生き残りの全員が理解しそして装甲車に乗り込んで基地をあとにしようとしたが……急に停車するもんだからなんだと思い隊長格が覗く
そこには黒い奇妙なコートを着た銀髪の少女がいた。
怪しさ不気味さ満点だ。
だが直感が本能が理解した。
こいつだ！こいつが仲間達を殺した犯人だ!!
運転手も理解したのかアクセルを思いっきり踏んだ。
「美女を轢くのは気が知れるが殺し屋なら文句ねぇよな!!!なりな!!!」そう普通なら轢かれてミンチになる筈だった。
だがあり得ない事態に遭遇した。
まるで壁に激突したような衝撃が襲う！
「おいおい嘘だろ!?」
銀髪の少女が無傷で装甲車の突進を止めたのだ。
隊員が装甲車上部から鉛玉をぶちこんでやろうとしたとき少女はなにかを呟いた。
「はい……姉様、セカンドは離脱行動を取ります」と離れたと同時に隊員は一瞬だけ理解する。
時間差でロケットランチャーが撃ち込まれたこと……だがそれだけであった。

燃え盛る装甲車を見詰めてるセカンドの側に全員が集まる。
そして全員が最後に到着したファーストを見ると少しだけだが嬉

しそうに駆け寄る。
ファーストからしても最近覚えた微笑ましい光景に自然と笑えるようになった。
彼女はまだ分かってないがそれが人として大事なことであることに気付くのはまだ先だ。

そして一部始終を無人偵察機で中継されていた。
むろんアンブレラにだ。
特別会議室では称賛の声があがっていた。
「素晴らしい、タイラントもむろん素晴らしいがＦ―１０１は想像を遥かに越える」
「しかも指揮系統がハッキリしてる。これならＴ―１０３を改良しＦ―１０１の指揮の元、行動するようにすればこれ以上の戦果が期待出来そうだ」
「それにまだ本格的ではないが社会に潜伏出来る可能性があるのは喜ばしいことだ」と誰もが絶賛していた。
命令に従順で尚且つ成功率を上げるために臨機応変に対応し今ではファーストは報告書の作成など事務作業もこなせるようになってる。
だから誰も疑問に思っていなかった。
ファーストには徐々にそう感情と共に心が……

単独任務セカンド

私はセカンド、Ｆ―１０１―２、二番目に生産された個体です。
私が何なのかよく分かりません……けど姉様が好きそれだけは確かです。
優しく暖かくそして確実に任務をこなすそんな姉様が大好きです。
そして私は現在、単独任務を与えられてます。
前より考えられていたＴ―１０３の改良型との連携実験をテロリスト……いや反政府組織の軍で試そうとなった。
ヘリで輸送されてる３体のタイラントのカプセルが目にいく
そして私は改良型のアーマードコートでヘリに乗ってる。
『セカンド聞こえるか？』
「聞こえてます」
『ならば任務内容を変更する。目標施設にて我々アンブレラを裏切った連中がいるが幸いなことにテロリストの基地だ。今から送るサージ・バンゲルの抹殺を最優先にしろただし目撃者も殺せ以上だ』と端末に顔写真が送られる。
今回の武器はＢＯＷ用マシンガンとロケットランチャー、試作１３ミリ爆裂鉄甲弾使用の専用のマグナムだ。
『まもなく降下地点です』とアナウンスが鳴る。
最終確認をして
「セカンド……これより任務を開始します」
私は姉様から貰ったくまさんの御守りを懐に仕舞ってからヘリから飛び降りた。

さすがにパラシュートを使ったがカプセルで降下したタイラントはもう起動しており待機していた。
「Ｔ１はバンゲル……この男の抹殺、Ｔ２、Ｔ３は私に随伴、目撃者は抹殺、行動開始」と３体はセカンドに随伴した。

そしてその反政府組織の基地で研究員は軍人達に自身の商品をプレゼンしたのであった。
サージ・バンゲルがアンブレラを裏切ったのは単純に金と地位に不満を抱いてのことであった。
そしてTウィルスと彼が担当していた研究、タイラントの暴走状態スーパータイラントが休眠してるカプセルである。
サージはスーパータイラントの戦闘力に目をつけてあえて人の形に拘らず異形化させて戦車など兵器にも勝てる程の戦闘力そしてプログラミングすれば命令を実行する能力があれば戦場でのパワーバランスが変わると思っていた。
実際、研究そのものはすぐに成し遂げたが上層部は理解を示さず意味のない実験だと無能だと言われ挙げ句口を開けばF―101のことばかり話す。
何故だ!?と何度も思った。
紛争など争いに事欠かないこの世の中なら自身の研究が役に立つ!!
何度話しても結局理解してもらえずアンブレラに見切りをつけて研究していたタイラントも運び反政府組織に理解を示してもらった。
設備が必要だがタイラントを製造するためのノウハウは持ち合わせいるのでこれで私の地位と名誉、金と輝かしい未来が待ってる。

「どうでしょうか？将軍、なんでしたらこのタイラントを敵に放ってお確かめになっても構いませんが？」
「ほお？貴重なタイラントをさっそく使ってよいと？」
「はい、その為のタイラントです。生物兵器は戦場で使ってこそ意味があります」
「ならばさっそく……」そう思った時、外で爆発音が聞こえた。
「何事だ！」
「敵襲です！ですが……その……」
「なんだ!?ハッキリ申さんか!!」
「しょっ、少女です！男２人を率いて我が基地に乗り込んで来ました!!」将軍が何を言ってるんだこいつ？と思ってるがサージが兵士に質問をする。
「それは銀髪で赤目、身長は１６０くらいかな？」
「そっそうですがなぜ？」サージは笑いが押さえられなかった。
自分の障害となった目の敵がこんな所で現れてくれるなんて思いもしなかった。
「将軍、もしよろしければ私のタイラントで屠ってくれましょう」事情も話すと将軍はすぐに納得し起動するように許可を得た。
さっそく端末からタイラントの起動プログラムを作動させた。
当然、対象はＦ―１０１だ。
そこまで作業が完了したときであった。
突然壁が吹き飛び予想外の相手が現れたのだ。
黒いトレンチコートを着た巨漢
「なぜここにタイラあがっ!?ばなぜ……ごの」圧倒的な腕力と握力に頭を掴まれサージの抵抗はむなしくあっさりと頭を握り潰された。
そしてタイラントは抹殺対象が死んだのを確認しそして周りの人間も殺し始めた。
ただし端末が無事なまま……

銃撃が鳴り止まぬ基地にてセカンドは的確に指示を出していた。
タイラントのタフさを生かしたごり押しと知能が高く兵器を扱えるピクシーの相性は大変良かった。
お互い長所短所が真逆であった為に噛み合ったと言えるだろう
そしてタイラントと連携しての基地制圧に時間は掛からなかった。
生き残りが居ないかタイラントを散開させアンブレラのデータを回収していた。
そして予め確保しておいた輸送ヘリにて帰還しようとした。
だがそこで事態は変わった。
散開させていたタイラントを待ってる時、上空から何かが落ちてきた。
ゴロンッゴロンッと転がって来たのは心臓を抉り取られていたタイラントであった。
そして前方に近づいて来る奴がいる。
切り裂かれぐちゃぐちゃになったタイラントを引きずって来るタイラント
両腕が鋭い爪、そして岩のような皮膚、明らかに暴走してる。
「暴走体を確認、処分します」けどセカンドとしてはやりたくない
そもそも単身でタイラント撃破は今のところファーストとサードしか出来ない芸当であった。
私達ピクシーには個体差がある。
セカンドは完全なファーストの下位互換であった。
残弾はロケットランチャーが2発、マシンガンが198発、マグナムが8発と正直、心許ない状況だ。
けど殺るしかない、タイラントを失ってしまったが姉様ならやり遂げる。
マシンガンを全弾掃射する。
やはりなのか頭と剥き出しの心臓を守りながら頑丈な体でごり押ししてくる。

弾が無くなったのでタイラントの爪を避けながら鈍器として殴り付け予め発射準備を済ませたロケットランチャーをゼロ距離で発射する。

というよりはこのＢＯＷ用ロケットランチャーはそれだけ頑丈に作られてるのでゼロ距離射撃でも撃てる仕様になってる。

心臓だ！

「グゥオォォォ!!!!」当たったけど岩のような皮膚が剥がれただけで決め手にはならなかった。

そして怒りに任せて向かって来るが避けて避けてそしてマグナムを撃ってはナイフで柔らかい間接を切り裂いてかれこれ１０分の出来事だ。

暴れさせながら輸送ヘリそれも貨物ハッチが開いてる中に誘導した。

そして勢いよく突き出された爪を避けて急いで外に出てからロケットランチャーを撃った。

そして自身が吹き飛ばされる程の輸送ヘリが爆発した。

形としてタイラントが残っていたが万が一再起動したら困るので近くにあった攻撃用ヘリに乗り込んだ。

死に際のタイラントは異常な変化を迎えて予測不能な化物に変化するのも記録で聞いてるからだ。

訓練を受けているので扱える。

そして未だに動かないタイラントに向かってありったけのミサイルと機関銃を撃ち込み今度こそ跡形もなく吹き飛ばした。

「セカンドからゴブリンリーダーへ応答願います」

『こちらゴブリンリーダーどうぞ』

「暴走タイラントによるイレギュラーが発生しましたが鎮圧完了及びサージ・バンゲルの抹殺完了しました。当基地の現状はどうしますか？」まさかこのまま放置は考えづらい何らかの証拠隠滅をする筈だ。

『それでしたら問題ありません、まもなく迎えのヘリが到着します。現状のまま待機願います』

言われるままにヘリを着陸させて待機した。
今回の任務達成度はどうだろうか？
結局、タイラント３体を失ってしまい武器も壊れた。
それにしても暴走体は異常に危険と記憶していたがあれだけ強いとは予想外だ。
今回は運が良い、だが次は？これ以上の暴走状態に発展したら？勝てないだろう
肉体的スペックに秀でても私たちＦ―１０１は武器を用いてやっとだ。
次はどうすれば良いんだろう？
帰りのヘリを待ちながら私は考えるのを止めない
けど早く来ないだろうか？
姉様に会いたい、甘えたい、もっと姉妹で話したい
次に全員揃うのはいつだろうか？
それは分からない……分からない……

妹達と社会潜伏実験1

「潜伏実験……ですか？」あれから更に任務をこなし言葉も流暢になってデータを取られる毎日をこなしていたファースト達は次の奇妙な任務に戸惑っていた。

「そうだ。君たちが人間社会に溶け込めるかその検証実験を行う」現在進行形で学習してる新しい妹達セブンからトゥエルブまでの教育も任されていたファーストからすれば現在教育係が居なくなるのは不安材料でしかないからだ。

「だが新しく量産されたピクシーもいる。それも分かる。それでだ。聞けばセカンドも教育係をしていると、ならばセカンドに引き継がせファースト、サード、フォースは実験に参加してもらう……おって指示を出す。解散だ」と解散しファースト達は専用区画に作られた住居区画に戻り各々が話し合うが不安がってるのはセカンドであった。

「姉様、私は姉様程上手ではありません」

「セカンド……なら私も不安があります。社会潜伏はこれまでの任務とは違います。それに不安を持たないのであれば学習の意味が無くなる。だからあなたが思ったことをやればいい……セカンドあなたは妹達に何を学ばせたいですか？」ファーストは教育係から様々なことを学びそして思ったことを妹達に学ばせた。

私にとって大切な存在だ。

セカンドが同じ気持ちを会得してるのは嬉しいことでありだから任せられる。

ようやく考えが纏まったのかセカンドは口を開いた。

「私は……姉様から教わったみたいに妹達に……笑ってもらいたいです」

「なら大丈夫、失敗も学習してそして教えてあげればいいのよ」

「……姉様はやっぱりスゴいです。でもありがとうございます。セカンドは教育係の任務を引き継ぎます」これで心配はないセカンド

は真面目だ。
それにファイブとシックスだってセカンド程でないにしろ妹達に対して真剣に向き合ってる。
けどあとあと妹達が別れを惜しむ？とは思いもしなかったが……

そして初めて駄々をこねる妹達を治めてから空港まで送られた。
３人はコードネームと髪型、ファッションを変えて研究員と別れる。
ただし監視員がそこら中にいるが……
ファースト改めて『トファース・フェリア』銀髪ロングヘアーでカジュアル系の服装だ。
分かりやすく言えばバイオ２のクレアの服装を想像してください、メインカラー黒
サード改めて『ドーザ・フェリア』銀髪ウルフヘアーにラフな服、メインカラー赤
バイオＲｅ３のジルみたいな服装を想像してください
フォース改めて『フォウ・フェリア』銀髪ポニーテールにある意味一番女性らしい格好をしてる。
一般的なスカートを履くメガネをかけた知的そうな女性、メインカラーは緑
「ここが空港ってやつか？姉貴」
「そうね。歴史上テロ現場になりやすい場所の１つ警戒しといて損はない」まあ下手すればする側になりそうだが？
「ですが姉さん、人の社会はこんなにスゴいのですか……わたしは驚きです」と怪しまれないように観察しながら受付まで行く

老人から子どもまで様々な人種が居る空間は初めてだ。
受付でもすんなり行くが体重に関しては絶句された。
なんせ体重は百キロオーバーだ。
一般的な女性の体型をしてるのにこの体重は驚き物であろう
そして金属探知機の所ではどうやら任務等で摘出し忘れた弾丸が反応してしまい言い訳が大変であった。
そして飛行機に乗った経験は貴重な物であった。
おそらくこの先、要人警護とやらが始まれば乗る機会が増えるだろうが……
そして無駄なエネルギーを消費しないために全員は睡眠をとることにした。
飛行機と言えど小型であり向かう先は田舎だと言われていたがアンブレラ社が根付いてから急速に発展したとされる所、『ラクーンシティ』アンブレラの影響が一際大きい所で潜伏実験が開始される。
まずトファースは警察官としてフォウはスペンサー記念病院のバード博士の助手兼看護師、ドーザは実は決まっておらず就職から頑張んないといけないが理由があった。
それはアンブレラがドーザの社会潜伏能力が非常に高いと判断したからだ。
任務の時は冷徹な殺戮マシーンにそうでないときは非常に人間味溢れる雰囲気に早変わりと上層部は切り替えがハッキリしてるドーザを高く評価していた。
その為にドーザにだけバイトでもいいから就職等が可能なのか確かめたかった。
というのがアンブレラ上層部の考えだが彼らは勘違いしてる。
人間味溢れる雰囲気こそがドーザの本当の姿で任務の時などは演技である。
理由は上層部や賢い研究者は馬鹿ではない、あまりにも知能と学習能力が高いので反乱を起こすのではないか?その懸念は当然抱いていた。
実際知能向上型のタイラント『ネメシス』と呼ばれたのは脱走を企

てるほど知能と自我を発現させている報告を聞いてるので彼らに爆弾を内蔵させるべきだと主張する側と知能が高くなったからこそ爆弾は止めて今まで通りの運用をするべきだと主張する側が存在する。
その為にドーザは演技することで人間味を隠し爆弾を内蔵されないように従順にしている。
その努力もあり爆弾を内蔵させる側の案は未だに通ってない
飛行機という貴重な体験をして別の空港に着くと今度は車での移動となる。
当然、3人は学習してるので運転は難なくこなせる。
実は留守番してるシックスは乗り物好きで全フェアリーの中で一番上手でだいたい操縦、運転を任せてる。
その為に久々である。
変わらない景色でも十分新鮮でありそして一回ガソリンスタンドに寄った。
そこでの買い物も新鮮である。
更に1時間ぐらい走るとやっとラクーンシティに着いた。
住所通り向かうとかなり大きな家に着いた。
予め受け取っていた鍵で車庫入れしてから入った。
改めて確認してもかなりの広さだ。
そして玄関にはメモが置いてあった。
『地下室に向かえ』何なのか?分からないがメモの通り地下室にエレベーターで降りると一変して馴れた研究所みたいな部屋が拡がっていた。
入ればモニターが勝手に点いた。
相手はトファースの教育係をしていた1人だ。
「博士、お久しぶりです」
「ああ、元気そうでなによりだ。今日からその家が拠点になるがまあその地下室を見て分かると思うが君たちをメンテナンスする為の設備であり武器等もある。言わば秘密基地みたいなもんだ。まあ監視カメラもあるが我慢してくれ、そして今日から3日間は街の探索に当たるといい、任務前の下見は大事だ。それと馴れんかもしれんが頑

張りたまえ、別任務があった場合も様々な経路で連絡が行く……では検討を祈る」ととりあえず身体検査をしようとした。
ドーザとフォウも賛成し専用の機械で検査をしていたがふと疑問に思ったかのようにドーザが喋った。
「そういや、なんでカメラってやつであたしらを監視ってやつをしてんだ？」
「周りの言葉を信じるならだけど人間と大差ない知能を持った生物兵器に警戒してるだけよ。反逆でもされたらって思うと尚更じゃない？」
「反逆？　裏切りか？　別にする必要なくないか？」
「ネメシス―T型の内脱走しようとした個体がいると記録で確認しております」
「けどなんでそのネメシスってやつは脱走しようとしたんだ？」
「私達とは違って度重なる改造実験に身体中を弄くり回されるから脱走したい気持ちに刈られるのは必然よ。私もあんな寄生生物に肉体改造されるなんて分かってたら脱走ぐらいは考えるわ」とわざと監視カメラの前で語る。
わかるかも知れないがこの会話事態、演技であるし本音も混じってる。
そしてこの3人ほど脱走願望が強いのはいない
更に寄生生物の実験は真面目に嫌だと思った。
やられるなら処分される覚悟で暴れまわるだろうぐらい嫌だ。
そしてそんな様子を見る上層部がいるわけであるのだが……
当然上層部も見ていた。

『姉貴は脱走とか考えるのか？』
『別にわたしは妹達が捨てられたりあんな寄生生物の実験とかされなければなんとも思わないわ、私達は兵器、それ以上もそれ以下もないわ、だからこれが精々許されるわがままよ』と話が進むが様々な話し合いがされる。
「ふむ、まだプランだけだが改造実験は中止した方がよさそうだ」
「まあ元々、無理してやるべきプランではないしな」
「この様子だと爆弾内蔵もしなくてよろしいだろ？」
「そうだ。逆に我々が気を付けなければならないのは普段の使い捨てを下手にしないことだ。そうすれば最良の結果を出すだろう」
「人体実験も本人達の希望が上がったらで良くないか？あれ以上を望むのはリスクが高い」と話が成されるが特にファーストの扱いを気を付けるべきだろう
彼女がすべてのフェアリーを束ねる貴重な存在だ。
故に彼女に反感を抱かせなければ反逆されることはないことそれが共通の認識になっていた。

そして見事に勘違いをさせたことを知らない３人は街を探索していた。
まあ様々なことがあった。
へんなナンパがあれば警官が助けに来たりファミレス等では美味しそうな料理があれば病院ではリハビリしてる患者やそれに付き添う看護師や医者、ドーザの就職またはバイトで働くための方法を探したり下見をしたりと貴重な束の間の休息を楽しんでいた。

妹達と社会潜伏実験2

街に来てから4日目ついに職場で働く時が来た。
トファースはラクーン市警察署に出勤していた。
初めての制服に袖を通すのはなかなか緊張したが警官として新しい生活が始まろうとしていた。
そこで気づいたが上司になる人が初日の探索の時に助けてくれた警官マービン警部補だった。
そして新人が来ることを知っていた警察の人達はやたら優しかった。
「みんな彼女が例の新人だ。仲良くしてやろう」とマービン警部補がわざわざ全員の挨拶の仲介をしてくれた。
心底助かるし良い見本だ。
「よう美人さん、俺はケビン・ライマンだ。よろしく」と気軽に挨拶をしてきた男性だがよく見ると射撃の腕が良いと思えるぐらいフェアリー達が感じる独特な直感がそう伝える。
握手すると尚更だ。
「射撃の腕が良さそうですね」
「おお！良いねぇ、あとで競わねえか？」許可されるならと答えて別れたがマービン警部補は逆に驚いていた。
「よく分かったな、ライマンは何回も射撃大会を優勝してる。署内じゃ一番だ」と挨拶しながら署内を案内してくれる。
それにしてもなんでだろう？研究所で見た謎のギミックみたいなのが山ほどあるが……と不思議そうに署内を見ると
「不思議だろう？まあ無理もない元々、美術館だったものを警察署に改装したんだ」それにしては本当になんで隠し仕掛けみたいなのがちらほら見えるんだろう？
なんか無性に試したくなった。
色々と案内が終わったあと射撃場？と呼ばれる所に案内されそこにはケビンがいた。
「よっ！美人ちゃん、お手並み拝見させていただくぜ」とハンドガン

を渡されるが正直、ＢＯＷ用マグナムを使ってるのでおもちゃに見える。
そして片手で構え狙い定める。
「おいおい、流石にそれじゃあ」と言い終える前に全弾撃ち尽くした。
２人は唖然とした。
トファースは反動を持ち前の怪力で相殺し全て急所に叩き込んだのだ。
頭、心臓、関節、股間……何故か執拗に撃ち込んでいたような……
やっと持ち直したケビンは絶賛した。
射撃大会でも今ほどの射撃はまるで世界大会並みの腕ではないかと……
「いやー、良いもん見せてもらった。マービン、歓迎会には俺も付き合わせてくれよな」
「いいがそれより始末書がまだなんじゃないか？」
「さてなんのことか？」とあっさり流すケビンにマービン警部補がため息を吐く
「まったく、それさえなければＳ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．にだって入れてるだろうに……」Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．？とはなんだろうか
疑問に思っているとマービン警部補が答えてくれた。
「Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．は正式名称は「Ｓｐｅｃｉａｌ　Ｔａｃｔｉｃｓ　Ａｎｄ　Ｒｅｓｃｕｅ　Ｓｅｒｖｉｃｅ（特殊戦術及び救助部隊）」で分かりやすく言えばエキスパートで構成されたエリート部隊だ」
「なんせ隊員は元空軍だが陸軍の軍人上がりから警察、果ては民間人までいる。という俺も何度か試験を受けたんだけどな……何が悪かったんだ？」
「いやだからな……その勤務態度が……」とマービン警部補は呆れ果てまた案内に戻ったのであるのだがケビンと入れ替わりで入って来た人がいる。

自身が着けてる警察バッチとは違うのを着けていた。
Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．と書かれてる。
「どうしたんだマービンこんなところに？」
「クリスか、今日から勤務する新人を案内していた所だ」成る程、間違いなく軍人だろう
それもシックスに似て乗り物の操縦が上手そうだ。
「彼女が？……悪いがもしかして軍人上がりか？」なかなか勘の鋭い男だ。
だからこそ予め経歴書には傭兵時代を記入してるから誤魔化せる筈だ。
「ええ、でも私は傭兵上がりです」
「傭兵？なんで……いやそれより年齢が……」
「昔は妹達を養う為にお金が必要だっただけです。それよりバランスの取れた肉体ですね。軍人時代の名残ですか？」
「そうだったのか……悪かった。すまない、それと誉め言葉は素直に受けとるさ」と別れるがこれは今後要注意人物かもしれない
しかもあれが平均だとするなら他の隊員も侮れないかもしれない
それに明らかに他人との存在感が違う
なんでだろうか？マトモな武器さえ持っていればタイラントそれも暴走体にすら勝ちそうな……そんな本能が警告してる。
しかし戦闘以外での職務は大変の一言に尽きる。
まず私は知識それも断片的にしか得ていない
その為に相手の感情を理解しなければ達成不能と判断した。
これからパトロールに出るがかなり不安であった。

スペンサー記念病院のＮＥＸＴ２その研究室にてフォウは自身の

上司と対面していた。
ナサニエル・バード博士に対する感想だが理解不能であった。
少なくともフェアリー計画に参加していた人間は基本的にはいい人達である。
その為にＮＥＸＴ２での職員の対応には戸惑ったがよくよく思えばこれも任務だと割り切れば……割り切れば……
なんか口出ししたくなってきた。
あってからあれよこれよとこなしたがワクチンの話にはかなりの興味がある。
当然だがフェアリーシリーズの体にはＴウィルスがある。
そしてマニュアルでは過剰暴走しそうになったときバード博士が開発したワクチンを使うべしとならばそのノウハウを知る良い機会だと思い質問を繰り返したら何故かワクチンの話がヒートアップしてしまった。
様子からしてワクチンの重要性を語ったら理解者でも現れたかのように熱心に語りだした……傲慢さは変わらなかったが……
その過程でワクチン製造の工程を教えられたりしそしてもう一つの任務として対ＢＯＷ用の兵器のアドバイザーとして研究員に意見を出しては改良改造を繰り返した。
それならよかった。
だが表業務の病院の看護師としてが大変であった。
なまじ人間に限りなく近い知能が逆に難解な任務に発展させていた。
人の心を理解しなければならないのが人間社会だ。
トファースすら苦戦するこの難解な任務はフォウにとっては処理能力が追い付かないほどの任務だ。
いやマジで!!!
（姉さん……私は無事完遂することが出来るのでしょうか!?）
フォウの苦労はこれからも続く

そしてドーザだが……

「じゃあ明後日からよろしくお願いするよ」

「はい、よろしくお願いいたします」

「いやー大型免許を持ってる人がバイトに来てくれるなんて助かるよー。やっぱり持ってる人が少ないからね」

「そうなんですか？」

「そりゃあ免許取るにはお金が掛かるからね。じゃあよろしくね。ドーザさん」と恰幅がある優しいおじさんの運送のバイト面接にあっさり合格したドーザだったりするのであった。

（さーて姉貴とフォウは上手く行ってるんだろうな、あたしより頭良いしな）

ファイブ＆ａｍｐ；シックス

街道から少し離れた崖から眺める者がいた。

Ｆ―１０１―５コードネーム『ファイブ』

Ｆ―１０１―６コードネーム『シックス』

フェアリー量産計画、第一期の個体だ。

セカンドの教育係を手伝いながらも日々任務をこなしていた。

「ファイブ、ターゲットが来る」

『はいはい、さっさと終わらせるよ。どーせボーンでしまい』と狙撃銃で観測しながらうつ伏せでじっとしているシックスがそう伝えるがめんどくさそうにファイブが無線に答える。

この２人は個体差がハッキリ現れておりファイブは楽天家、シックスは超真面目な堅物、しかも能力まで個体差が生じたのでぶっちゃけ失敗例と称されているがその代わりタッグで組ませると他のフェアリーより高い結果を出すのでよく２人で任務に当たる。

そしてファイブが街道を走る高級車を見つめる。

任務は要人暗殺だ。

あるポイントを通過する時、ファイブは起爆スイッチを押した。

そうすると先頭車両は派手に吹き飛び後方に下がれないように爆弾で滅茶苦茶にした。

慌てて守りを固め始めたがそこでシックスの狙撃が始まる。

因みに狙撃銃と言っても対戦車ライフルを更に大型化しＢＯＷ用に製造された５０ミリ多目的狙撃銃だ。

シックスの能力も合わさり３キロからの狙撃が可能だ。

そしてたかだか防弾仕様の車の装甲など容易く撃ち抜き車が盛大に爆発するが更にファイブが追い撃ちでＢＯＷ用マシンガンを掃射し要人は護衛諸々識別不能な肉塊に早変わりした。

「おーいシックス、目標達成だけど迎えは？」

『事前に聞いてたでしょ、ここから南西に５キロの所に車があるか

らそれまでは歩きよ』
「えー、めんどくさいシックスが取ってきて迎えに来てよ」
『歩きなさい！姉さんの名に傷でも付ける気？』とこの会話だけでもどれだけ個体差が出てるのか分かるものだ。
はいはいとファイブは栄養補充目的で比較的に形が保たれてる死体を手軽サイズまで分解して食べ歩きしながら向かうというおぞましい行為をしていた。
だがそれを咎めるものはいない

そして車まで合流したがシックスは不機嫌であった。
原因は言わずともファイブがあまりにもまったり合流してきたからだ。
「ファイブ遅い！これぐらいの距離もう少し早く来れるでしょ！」
「いいだろう？まだ時間はたっぷりあるんだし」と詫びれもしないで人肉を食べる。

「あーもう、それに口元ぐらい拭きなさい！一般的に誤魔化すのにも限度があるでしょ!!それに早く着替えなさい!!」
「分かったよ……けどよぉ、もう少し肩の力抜けよなリラックスリラックス！」とのんびり着替えるファイブを見てシックスはわなわなと体を震えさせ
「誰のせいだと思ってるのーーーーー!!!!!」

そして車を走らせるシックスとカチャカチャと爆弾を弄るファイブだが運転中のシックスはどこか楽しんでいた。
「なあ思ったんだけどシックスはなんでそんなに乗り物が好きなん

だ？」
「別に機械は良くも悪くも乗り手の腕を裏切らない……それだけよ」
「そうか……」
「ねえ、ファイブはいったい姉さんから何を学んだの？」
「なんだよいきなり？」
「真面目な話よ。ファースト姉さんから何を学んだのか……気になるに決まってるじゃない」ファーストは個人に合わせて教育内容を柔軟に変え全員に何かしらの道を示した。
セカンドは実質ファーストの下位互換ながら背中を追いかけ、サードは他より肉体面に恵まれながら社会潜伏能力が高くフォースは学習能力が高く知能が優秀、なら失敗例と呼ばれたもう一人の私、ファイブが何を学んだのか気になった。
「わたしが学んだのは『責任』だよ」
「責任？」
「そのまんまだよ。姉さんは毎日めんどくさがる私にこう言ったんだよ」
『あなたがどれだけだらけようが構わない、けどどんな行動にも責任は必ずある。それは言葉では決して言い表せない、だから、もしどんなことがあってもそれはあなたが行動した結果であり背負わなきゃいけない責任でもあるの、長く話しちゃったわね。じゃあ勉強から始めましょ、今日は玩具弄りよ』思い出せばあれからなんとなく方向性が決まり気づけば真逆のシックスと連携訓練が始まりケンカしながらも今では2人で任務に就いてる。
不思議な事だ。
シックスもあまりにも不器用過ぎて失敗例と呼ばれたが射撃それも超長距離射撃と乗り物の運転及び操縦技術の高さをファーストが見出だしてくれたおかげで単体では価値がないと判断されたがその2つの才能が存在価値を示してくれた。
だからファーストを姉と認め更には崇拝してる。
そしてそんな話を聞けたシックスの胸に引っ掛かってた何がスト

ンと落ちた。
実はシックスも別の意味で『責任』を教えられていた。
言葉は違えど結局は同じだ。
「はぁー、なんでファイブと組まされたのかなんか納得したわ」
「なんだよ。変なの……まあいっかほれ写真もーらい！」とファイブはいきなりカメラを取り出してはシックスを撮った。
「なにするのよ!?」いきなりのフラッシュで運転が危うくなったので怒るがイタズラを成功させたファイブは詫びれもしないで
「今のシックスの顔良かったからな、姉さん達……いや妹達に見せるのも良いかもな～　」
「ちょっと消しなさいよ！恥ずかしいでしょ!!」
「や～だよっと……それにお客さんが来たようだよ」と後ろを見ると黒い車が5台、遥か後方から猛スピードで追っかけて来る。
「まったくファイブがのんびりするからよ！」
「その割にはシックスだって風に当たりながらまったり走ってるじゃんお互い様だよ」
「もう、運転は任せなさい！だからファイブは」
「後ろの追っ手を始末すれば良いってことだよな?……今頃、姉さん達はどうしてるかな?」社会潜伏実験をしてる3人を思い出す。
面白い土産話があれば良いなと思いつつシックスは笑う
「心配いらないでしょ?私達の姉さんよ」確固たる信頼からくる迷いない言葉がファイブを満足させ
「だよな……さーて派手に行きますか」と武器と爆弾を手に戦闘を始めるのであった。

社会潜伏実験３

初日からぐったりと疲れたトファースは疲れた精神で帰っていた。
マービン達が行ってくれた歓迎会は良い意味と悪い意味で終えた。
良い意味はあの歓迎会を通して様々な交流を得たこと
悪い意味ではＳ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．面々に戦慄したこと
特に歓迎会に居たクリス、ジル、バリーは特にヤバい感じがする。
下手すればサシでも勝てないかもしれない
通常のタイラントや戦車、装甲車にすら恐怖を感じたことがないトファースにとってこれ以上にない危機感だった。
幸いアルコールはＴウィルスが即分解するので酔うことはなかったしむしろ食べ物に関してはぜひ妹達にも食べさせてあげたいと思った。
そして家に着くとき自身とは反対方面からフォウの姿が見えた。
その顔には精神の疲れが見える。
「姉さん……今帰りですか？」
「フォウもそのようね」と家に入るとやたら良い匂いが漂う
そしてリビングに行くとエプロン姿のドーザが料理をしていた。
「おっ？姉貴にフォウもお帰り！もう少しでシチューってやつが出来るから待っててよ」と２人は信じられない目で見ていた。
フェアリーはトファースを含めて全員教わっていなかった。
「ん？ああ、近所のおばちゃんが教えてくれたんだ。あとステーキにポテトサラダ、コンソメスープもあるから食べててよ」と食卓に並ぶ料理に唾を呑む
初めてにしては予想以上の出来栄えだ。
そして恐る恐る食べると美味しかった。
「どうかな？」とドーザも初めての料理にいまいち自信がないので聞くが美味いと聞けたらドーザは嬉しい気持ちになった。
更に近所のおじいさんから貰ったウィスキーをロックで割り１日の出来事を話していた。

所謂、情報交換である。
「警察署はかなり気を使うわね。まあ事務作業辺りが気休めだったわ」実際かなり力加減しないとうっかり怪力を暴露しかねない
その上、普通の一般的な人ならまだしもクレーム等してくる癖の強い相手にはどうしたら良いのかまったく分からないだから事務作業は気が休まる仕事である。
まったくもってマービン警部補がいなければどうなっていたか想像したくない
「フォウはＮＥＸＴ２では十分働けましたが看護士が辛いです。心情を理解しなければならないので」裏の顔であるＮＥＸＴ２での任務、ワクチンの開発や対ＢＯＷ用装備の開発等は今までこなしたのと大差ないので楽だったが看護士は別であった。
フォウなりに考えてもどう対処すればいいか分からない
せいぜい薬品や器具など人と関わらない仕事をこなせたぐらいだ。
「ふーん、なんか意外だね。姉貴とフォウなら余裕だと思ったけど」
「そうは言うけどドーザはどうしてたの？ご近所付き合い？」まあそれも重要な事だと理解してる。
ご近所付き合いが失敗すれば疑いの目を向けられるからだ。
そうでなくてもいきなり働き先が見つかるとは思ってもない
だがそんなことはドーザの気軽な一言で変わる。
「ん？あー、あたしもうバイト受かったから明後日から働くから」
「!?」２人に雷鳴が轟いた!!
「え？いやドーザいったいどうやって」２人は組織のコネで入ったものだからまったく想像が付かなかった。
「へ？普通に近所のおじさんと話してたら……」
『え？ドライバー？運送の？』
『そーなんだよ。どっかに若手で大型免許を持った人が居ないか探してるんだよ』
『あたし持ってるけど役に立てるのか？その運送ってやつ？』
『そりゃ助かるが……』
『別にいま仕事探し中だから逆にありがたいけど』と話がポンポン

進み初日でバイトが受かり更に近所の奥さん方と買い物をしては料理を教わったりとある意味一番世間に溶け込んでいた。
「というわけ、別段難しくなかったぜ」初めてだと思う
２人はドッと疲れた。
私達の苦労はなんだ?と思った。
「姉貴にフォウ……大丈夫?」

社会潜伏実験という訳ではないがファイブとシックスはアンブレラの上層部の警備をしていた。
「かったるいな〜……あと会議何分で終わるんだ?」
「何時間の間違いよ。それにしっかりしなさい、セブンからトゥエルブも見習いとしてきてるのよ。姉として恥ずかしい所を見せる気?」この警備には量産計画第２期個体であるセブンからトゥエルブまで参加してる。
全員、トファースに誉められたいばかりに初任務に張り切っていた。
そんなこと中でだらしない所を見られる訳にはいかなかった。
「つってもよー。これなら戦場に出た方がマシだぜ」
「……わたしもそうよ。下手に堅苦しい任務より戦場の方が楽よ……」それはどの個体でも言えたことであろう戦いに特化してることには変わりないのだ。
だが上層部がそんなことを考えてるわけでもないので従うしかないが……
「あー、悪かった……真面目にやるよ。それにしてもセカ

ンド姉は大丈夫かな?」
「ウィリアム・バーキンの研究所に出張だったわね……でも」
「セカンド姉は最近焦ってるかなら……Gウィルスなんてまさに願ってもないことなんだろうけどよ」そうここ最近セカンドは自身の力の無さに焦っている。
理由は暴走タイラントに苦戦したことである。
セカンドが責任感から来るのか力を求める傾向にありGウィルスの話を聞いては自身から願い出たことだ。
しかし本当にGウィルスが必要なのか……そもそも不安要素の塊にしかならないのに冷静に観察したほうが良いに決まってる。
「この仕事が終わったら姉さんに連絡してみるわ、姉さんなら」
「まあ説得は出来るか……」各々不安こそあるがとにかく任務に集中するのであった。

社会潜伏実験４

「ドーザさんラクーン警察署宛の荷物よろしくね。それと空いてるスペースには製薬会社アンブレラ宛の荷物だ」と１０トントラックの鍵を渡された。

「りょうかーい……さてと」と慣れた手つきでフォークリフトを操縦し荷物を積み込む

そしてこれまた慣れた手つきでトラックを運転する。

「姉貴とフォウの職場……どんな感じだろうな～」気楽に運転するドーザは２人がどんな感じに働いているのか想像しながら

裏手の元は美術館の搬入場所で荷物の受け渡しをしていた。

ただどうしてか？注目されてる。

「ああ、すまないひょっとしてだけどトファースさんの妹さんかな？」

「そうだけどよく分かりましたね」

「いやー、少し不器用だけど真面目で優しいって評判だからね。それにその特徴的な銀髪は今の所同じくトファースさんぐらいだから」と不器用なのは意外だけど素直に自慢の姉が評価されてることは嬉しいことだ。

「あれならエリート中のエリート、Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．だって夢じゃないよ」Ｓ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．あの姉貴すら恐怖を抱いた要注意人物が所属する部隊……

にわか信じがたいが姉貴の言葉を否定出来ない

そして姉貴に会えなかったがなんとなく職場の一端を見れたので良しとした。

けどアンブレラのセキュリティーサービスとは違うようだ。

（そう言えばウルフパックのルボさん元気かな？）トファースの初任務が死神ハンクとだったようにセカンドからシックスまでも誰かしら実力者と初任務をこなしてる。

ドーザとフォウはウルフパックとが初任務だった。

その中で隊長であるルボはいい見本であった。

それに各々の技術は称賛に値する。
そんなことを考えているといつの間にかスペンサー卿記念病院に着いていた。
荷物というか何故かトラックごと係員に引き渡すことになってしまい暇になったが休憩にはもってこいで広場を見ていた。
そこにはリハビリや気分転換してる患者や医者に看護師、親族や友人と様々な人で溢れていた。
（いいもんだな……たまに生物兵器だっての忘れそうになるよ）姉から愛情を教わり任務とは言えけっして無駄ではない交流が今のドーザを形作った。
（けど、兵器には変わりないだよな……あたし達は）似て異なる生物兵器、それは死ぬまで永遠について付きまとうだろう
脱走するにしてもなんにしても万全なアンブレラから逃げるのは至難のことだろう
何かアンブレラが崩壊するほどの何かが無ければ無理だろう
眺めてると妹であるフォウが居た。
子供の患者と遊んでいた。
ぎこちないがそれでもお互い笑ってる。
（なんだ……あんだけげっそりしてた割には上手くやってんじゃん）最初こそ疲れ果てていたが日に日に順応していった。
だが心配事があると言えばある。
自分たち3人は順応すればするほど前の兵器としての生活に戻れるのか？
ドーザ自身は自信がない
任務と日常、この日常を知ってしまえば正直戻れる気がしない
姉であるトファースなら出来るのだろうけど
（まあだから憧れるんだけどな）任務と日常を切り替え妹達に愛情を教え尚且つ戸惑っていたとはいえあの警官の様子だと既に順応し始めてる筈だ。
それに憧れるのは単に量産された自分たちがトファースと同性能を有していないのが一番の原因だ。

欠点が存在する妹達を導いてくれたのは間違いなく姉である。
本当ならセカンド、ドーザ、フォウだって欠陥個体だ。
そして車が返却されてなんだかんだ仕事も終わりなので会社に戻ろうとしたとき助手席に1つの書類がある。
そしてアンブレラのマークと『実験体の処分』……
「まったく休ませてくれないね」任務内容はラクーンシティの下水道に実験中のＢＯＷが逃げたので処分しろとの話だが……
それの処分するための調査……って！わたしやっと馴染んできたのに長期間休まないといけないじゃん!!
資料を見ても特定されてる訳ではないし何より下水道という広大な中から探さないといけない
んな1日そこらで見つかるとは思えないどんだけ広いと思ってるんの？
それに最近馴れてきたせいで生肉はなんか苦手意識が芽生えたしそれに嗅覚だって元々は普通より優れてるから下水道なんて本当なら嫌なんだけど！……仕方ないか
「まったく夜中に処分するか」運良く事が済めばの話であるが……

「姉貴にフォウすまねえ……疲れてるだろうに」とラクーンシティの下水道を武装して歩く3人がいる。
もちろんだがトファースとフォウに申し訳なさそうにドーザが謝る。
と言うのも悩んでるところ3人でやった方が早いとトファースが判断し夜に下水道員に成り済まして少しさ迷っていた。

「別に構わないわ、ハンター型ならほっとけない」最初に遊んだもとい訓練で散々倒したハンターは忘れることはない
そうでなくても非武装の人間には脅威でしかないので排除するのも納得だ。
「けどこの改良種はなんでしょうか？報告書を読む限り欠点だらけですが？」フォウは読んだ報告書を思い出すがハンターγと書かれしかもどう見ても欠点だらけで廃棄処分されるのが分かりきっている。
それが下水道に逃げたのはにわか信じがたいが噂になる前に排除したい気持ちは分からなくもない
下水という吐き気もする環境の中、探し続けるとまさかそれを飼育してる研究員がいるとは夢にも思わなかったが……
「はい……分かりました」とある1人の研究員をタコ殴りにしてから縛っていた。
そして理由があれだったのでアンブレラに連絡をした。
簡単に言えば欠点だらけであるがそれに惚れ込んで廃棄処分された振りをして自身で飼育していたと……
「で？姉貴、このバカの処分は？」真面目にこのはた迷惑な研究員は今すぐ殺してやりたいぐらいだ。
「アンブレラに引き渡せば良いらしいわ」それだけでこの研究員の末路が決まったもんだ。
ウイルス実験に使われるのは安易に想像出来る。
と言うより3人共、不特定多数の危険がある公共の下水道で少ないとは言えあっちこっち移動するハンターγを処分するのは面倒なことこの上無い
しかもこの研究員よりにもよって全体数を把握していない考える限り最悪なシチュエーションだ。
一番考えたくないのはウイルス漏洩だ。
トファース達もアンブレラを追い落とすならバイオハザードが手っ取り早いのは理解してるがそれでも不特定多数のそれこそ学習により無関係な一般人を巻き込んでまで実行しようとは考えないぐらいには良心はある。

そのあと職員に偽装したアンブレラのスタッフが引き取りに来てくれて研究員を渡したあとは兎に角地味な捜索が始まった。
歩けど歩けど見つからずしばらくこのループが続くのであった。

そんな時期に出張中のセカンドは……
「では所定の位置にて待機します」と出張していたセカンドは与えられた部屋にて待機しに行くがそれを見送る2人はじっくり観察していた。
ウィリアム・バーキンとアネット・バーキンだ。
「ふむ噂には聞いていたが本当に人間と大差ないな」
「そうね。あれでタイラントの変異種なんて信じられないわ」ウィリアムは偶然にも発見したGウイルスの研究に着手していたが実用化には程遠く難航していた。
一応、本社に報告こそした。
あまり理解されてないのも知っていたがそんな報告書を見て自ら出張を望んだ今アンブレラの研究員なら誰でも1度は耳にしたことがあるタイラントの突然変異種フェアリー、それが協力してくれるのだから願ってもないことだった。
「まあ関係ないがね。わたしとしてはさっそくTウイルスとGウイルスの調整にかかりたい、本当ならアークレイの幹部養成機関再生計画なんてウェスカーにでも任せたい気分だ」と言うのもセカンドからの意見でTウイルスとGウイルスを足して2で割った物を作っては？と言われた。
確かにGウイルスは強力だが安定性はないし、ましてやフェアリーを無駄にしたのであれば本社からの受けが非常に悪い

なんせフェアリーには教育の分コストか掛かる。
タイラントのように完成したらプログラムを入力してはい終わりとはいかないのだ。
まあその本来ならプログラミングされる部分が空白になったからこそのあの知能の高さに繋がってるらしいが……
「これが上手く行けばまたGウイルスの開発予算が手に入るだろう」まあ最近、成果が上がってないので渋られているが……

ファイブ＆amp；シックス　Ｕ・Ｂ・Ｃ・Ｓで任務

セカンドの出張してから姉であるトファースに連絡すら出来ずファイブとシックスは任務に就かされていた。
アンブレラの傭兵部隊『Ｕ・Ｂ・Ｃ・Ｓ』だ。
そこでファイブはファーブ、シックスはジンクスとして臨時隊員で派遣されていた。
ただし部隊内でこの人物がいなければ良かったんだが……
現地で合流することになってる２人は車で移動していた。
「この男……良い噂は聞かないわね」
「だろうな～、あの男が参加した任務での他隊員の生存率が毎回３割以下じゃ怪しすぎるよ。おおかたあたし達を毎回監視してる監視員じゃない？」データ収集等を専門にしてる監視員が居ることも知ってるしそれで臨時の金を貰ってる話も知ってる。
「それにしたって普通ここまでする？しなくても監視員ならそれなりに特別待遇を受けてる筈よ」
「あたしには分からないけどおそらく金だろうね。欲深いことで」となんとなくだが極秘でアンブレラに特別待遇されてる監視員が様々な所に居るのは知ってるがそれにしたってここまでやらなくてもと思わなくもない
今回の任務も２人はあくまでも保険であり基本的にはこの傭兵部隊に溶け込むことである。
現に装備もＢＯＷ用マグナム以外は一般兵装である。
いつもの装備は無いに等しいのだ。
「いつものＢＯＷ用爆弾はダメなの～？」
「施設でも吹き飛ばすつもり」因みにファイブの言ってるのは対タイラント用の爆弾だ。
「いやあるのと無いとじゃ全然違うでしょ」
「文句あるなら上に言ってよ。それにしても今回監視員多すぎ」とだらだらと合流地点を目指すのであった。

ある監視員視点

『ご機嫌如何かな？　栄えある監視員諸君。今日は君達に重大なお知らせがあるのだよ』

監視員専用の通信回線から上層部からの通信だ。

『君たちは金の為とは言え今日まで契約通りに中にはそれ以上の仕事をしてくれてる。そこでだ……そんな君たちにあるＢＯＷのデータを録ってもらいたいそれが我々からの感謝の気持ちだ』監視員は考える。

それだけクライアントが欲するＢＯＷが存在したのだろうか？

膨大な情報から一つ一つ思いだしそしてある結論に至る。

アンブレラの看板と言えるＢＯＷは今現在二枚看板になりつつある。

一つは究極の生物兵器であるタイラント、やつはその圧倒的な戦闘能力で完全武装の軍隊すら蹴散らすまさしく暴君である。

そしてもう１つはタイラントの突然変異種であり今絶賛アンブレラに関わるほぼ全ての人間が注目してる社会潜伏すら可能だと言われる元は暴君とは思えない生物兵器『フェアリー』だ。

知能向上型のタイラントどころか人間と同等下手すればそれ以上の知能を有し高い学習能力、命令に忠実ながら応用力も高く様々な技能を修得可能とし常人を凌駕する身体能力を持つ上層部が最も望む

理想のＢＯＷだ。
むろん単純な戦闘能力はタイラントに分が上がっており更に社会潜伏が可能だと言われるフェアリーが現れたことで単純に戦闘能力を向上させる方針に変わりその成果も出始めてるらしいが少なくともクライアントが欲しがるならフェアリーだろう
なるほど確かにこれほど高く売れるデータはこれ以上は存在しない
しかしそれらが参戦するとなると今回の任務がどれほど危険なのか想像に難くない
出きるならもう一押し何か欲しいそう思うと思いがけない話が出た。
『更に良質なデータなら少なくとも倍に最高で１０倍報酬を上乗せすることを約束する。それとこれはささやかな情報だ。有効活用するといいでは期待してるよ』
破格過ぎる!!!
現在前金で貰ってる金と終了時の後金の額だけでも普通の監視員なら十分な報酬だ。
むろん私は金の為に日々仕事に励んでいたので更に高い報酬を貰ってるがそれが最高１０倍に化けるかもしれない
だからこそ決心する。
送信されてきた情報を確認する。
今回の任務はアンブレラに入りこんだ産業スパイが研究所からＴウイルスを奪おうと警備部隊と交戦しそして運悪くバイオハザードになり研究所は閉鎖したがそこはＢＯＷを専門に研究していた試作段階のＢＯＷが山程存在するらしく貴重なデータが存在するので回収することだ。
まあ表向きの人間には研究所に残ってる研究員の救助らしい
研究所の地図を開き現状や装備、人員、リストの確認にフェアリーにどんな現場のシチュエーションを与えてデータを録るか彼の優れた頭脳がどんどん次々とプランを練り上げていく
「くくくっ……せいぜい楽しませて貰おう……かわいいフェ

アリー」監視員は監視員達は行動する。
金の為に!!!!!

ファイブ改めファーブとシックス改めジンクスは研究所前に張られたベースキャンプのU・B・C・Sに合流した。
「今回アンブレラから臨時派遣されましたジンクスとファーブです。よろしくお願いいたします」

「ふーむ……君たちが……か……失礼だが歳はいくつだ?」今回の救助に派遣された部隊長、日系アメリカ人が値踏みするかのように見て気になる質問をいくつかしていた。
２人の設定は年齢１６歳の孤児で傭兵をしていた所アンブレラにスカウトされうんたらかんたらである。
「すまないあまりにも若いと思ってな……それにしてもそうか……まあアンブレラにスカウトされたんだ。期待させてもらうさ、さて今回は研究所に残された生存者の救助だ。中は悲惨なことになってるが平気か?」どうやら生きていればそのぐらいの娘がいたらしい

そんな訳かやたら親切で優しいアンブレラに雇われてる傭兵にしては珍しい部類だ。
「それは名目では？」Ｕ・Ｂ・Ｃ・Ｓの扱いはかなり酷いのも知ってるし最悪データ録りの為の道具扱いだ。
今回だって自分達が保険として派遣されるなんてただの任務とは考えづらい
だから名目上では救助だと言い訳してるわけだ。
「そうだな……救助は名目で研究データが欲しいらしい……アンブレラらしい考えだよ。まったく」
やれやれとアンブレラに雇われて早くも５年になる部隊長は呆れながらも全隊員を集めてブリーフィングをするのであった。

今回突入するルートは正面と裏口、更に搬入口に下水道と４つ存在していた。
そして２人は他隊員２人と下水道から入ることになった。
正面は部隊長そして監視員は当然居るが誰が予想しようか？
今回２０人の隊員の内１７人が監視員が居るなんて思いもしない
これから欲望が地獄を更なる地獄へ変える。
果たしてどれだけ生き残れるのか？
それは誰も知ることはない

ファイブ＆ａｍｐ；シックス　欲望渦巻く中で

下水道モブ監視員達の視点

くくくっ……まったく運が良いぜ例のＢＯＷとチームを組めたんだ。

最初の任務通りデータを手に入れて帰ればそれだけで通常報酬は手に入るし間近で接してこそ得られるデータもあれば最低額の特別報酬は貰えるだろうし良いことこの上ないぜ

もう一人の奴とは今まで時と場合によるが報酬を山分けしてこのアンブレラ監視員を生き抜いてきた相棒だし抜かりなしだ！

相棒も任務のヤバさは重々承知してる。

金は生きてこそ意味がある。

あの世までは持っていけないからな

それにしても良い女だぜ……

これでＢＯＷなんて今でも信じられないこの銀髪にバランスのとれたスタイルあとはそれぞれ個体ごとに性格の差があるから好みの問題になるが当たり障りない会話をしても普通の女と話してるのとなんら変わりない

なんでアンブレラはその手の方面で売り出そうとしなかったんだ？売れるだろ？

知るよしはないだろうがファーストの時、生物兵器でも女性という性別の為かその手のことに本能的に嫌悪感があったらしく研究室を何部屋か壊すほど暴れたので中止した経歴があったのを監視員は知るよしはない

そして歩いていると厳重にロックされた扉にたどり着いたが問題があった。

手動で開けれるが専用のバッテリーの補助を得てやっと開く面倒な扉であった。

内部に侵入するにはたどり着いたこの一ヶ所しかなくどうしたもんか？
人間の力じゃまず開かねえ
そしてこのＢＯＷ共も一般人を装わなきゃいけない立場、怪力を披露するわけにはいけないだろう
引き返すかと思えば２人からこんな提案をされた。
「あのダクトから中に侵入しますか」ファーブと呼ばれたＢＯＷは扉の左上にあるダクト口を指した。
確かに女性なら入れるがよいのだろうか？
「下水道を歩いた時点で諦めています」と本当にダクトから内部に侵入していった。
まあ仕方ない開ける術がなければこうなるのは分かっていた。
せっかく運が良いと思ったがうまくいかないものだ。
相棒と共に来た道を戻り２人と分かれたのであった。

ある研究室の所長視点

くそっ！くそっ!!くそっ!!!なんて事だ!!!!
あのバカ共が無茶な実験さえしなければバイオハザードなんぞにならなかったのに!!
もはやこうなってはどう生き残るかだ。
幸い我が研究所は何ヵ所か万が一ＢＯＷが暴走し脱出不能ということを想定して造った避難室に逃げ込めたが食糧が尽きるのも時間の問題だ。

そうじゃなくても扉の向こう側には化け物共がうようよいる!!
本社に救援を要請したがあの化け物共を掻い潜り、ましてや倒すことが出きるだろうか？
少なくともＵ・Ｓ・Ｓ程の精鋭部隊でなければ不可能だろう
それほど我が研究所にて開発された試作段階のＢＯＷが優れてる証拠だが誰が来る？
焦りは積もるばかりだ。
見たくはないがこれだけの失態だ。
下手をしなくともモルモットにされて使い捨てにされるのがオチだ。
何とかして私の身の安全と命を保証してもらわなければ……ん？なんだこいつら？
避難室でもある程度外の様子が分かるように機材がありそこから監視カメラで外の様子を確認出きるようにしていた。
映るのは憐れな研究員が殺される様だがそこで見馴れた軍服の人間が映った。
すぐさま画面に食い付くが落胆する。
Ｕ・Ｂ・Ｃ・Ｓの軍服だからだ。
ダメだ……この研究所は地下に向かって５層あるが私が居るところは４層目、下に行けば行くほど強力なＢＯＷが保管されている。
２層目までなら良くてイレギュラーミュータントのリッカーやゾンビを改造した強化ゾンビしか現れない
モニターで確認出きる限り１層目と２層目に３人ずつ避難室に隠れてる。
こいつらは助かるだろうＵ・Ｂ・Ｃ・Ｓでも突破可能の筈だ。
問題は私の階層にたどり着ける人間が居るのかだ。
我が研究所での最高のＢＯＷは対フェアリーを想定した戦闘特化型の大型タイラントだがそれは流石に地下に隔離するために５層目に管理されてるがそれでも４層目にはハンターをタイラントクラスまで強化する実験の元生まれたハンターｔｙｐｅＴやハンターｔｙｐｅＧが何十体もいる。

とてもあれを突破出きるとは思えない
もはや助かる見込みのない……ん？なんだこの女共は？いくらなんでもこんな若い女が……女？まさか!?
私は慌てて本社が登録してる全ＢＯＷの登録データ洗い出した。
女で完璧な人型はたった１つしかない!!
懸命に探しついに見つけた!!!
フェアリーだ!!その第５個体と第６個体だ!!!
これだ!!これしか生き残る道はない!!!
奴らの戦闘能力はハンターなんぞ目ではない!!
いくら強化改良しようともハンターはハンター、敵ではない
いつもの専用装備ではないのが気になるが彼女等に保護を頼めば生き残れる!!
そして私のマスターコードを使いこの研究所の全データを渡せばこの地獄から救いだしてくれる筈だ!!!
フェアリーは命令を忠実に守る。
表向きでも救助と命令されれば怪しまれないように救助活動をするし
まったく兵器にフェアリーなんて名を付けるのは皮肉か何かだと思ったがこれほど似合うとは思いもしなかった。
何とかして私の存在を知らせなければ!!!

部隊長視点
俺は正直不安だ。
娘を病気で亡くし妻も紛争に巻き込まれて亡くなり自暴自棄に

なって酒に溺れてる所をあのアンブレラにスカウトされ今に至るが今の生活は良くも悪くも生きてる。
賭け事でバカ騒ぎ出来るぐらいには仲間が出来た。
だが今回の任務は何かキナ臭い
まず今共に行動してる2人は賭け事でバカ騒ぎ出来る仲だが他の連中の雰囲気が違う
俺は確かに見定めるように見ていたし自覚もしてるが他の連中は何かが違う
監視してるのだろうが監視の意味が違うと思う彼女達に何かしら秘密があると見ていいだろう
しかしさっきから腐敗臭が半端ない
戦場で馴れた嫌な臭いとはまた違う
それに奥に進むほどかなり荒れている。
電力は生きてるのだろうけどいったい何があればこんな酷い現状になるだろう?下手な戦場なんかより何万倍も酷い
「おい、この死体おかしくねえか?まるで大型犬に食い散らかされたようだぜ」と仲間が感じた違和感に気付き良く見ると確かにそうだがそれでも顎がなければ腸を食い千切られているし他の死体もそうだ。
そして生存者を捜すべく進むと通路の曲がり角からクチャクチャ……クチャクチャ……動物園の肉食動物が餌を食べる時なんかこんな音を聞くがこんな気味の悪い音はない
「まさか最近噂に聞く新型の感染症では?」
「あの気味の悪い話か……」誰かは知らないが報告書に人が人を食べる人食い病とかがあった。
にわか信じがたいが何故か現在、否定できない
「セーフティーは外してるな?構えろ……何かいるぞ」と至急品であるM4カービンを構える。
慎重に進みそして角を曲がるとそこには今まさに仲間が話していた人食いが目の前で行われていた。
無我夢中に一人の研究員だと思われる死体を2人が食っていた。

「おいおいマジかよ」と呟くと気付いたのかぐるりとこちらに顔を向ける。
おぞましいことこの上ない、顔半分が骨等が剥き出しになっていたり腸をぶらぶらさせている。
ふらふらしながらもこちらに歩んでくる。
「止まれ！止まらないと撃つぞ!!」と銃を構え威嚇するが聞こえてるのかすら怪しくなった。
「仕方ない責任は俺が持つ……射殺する」決心した隊長は明らかにおかしい2人を射殺した。
よく見ると心臓が剥き出しで潰れてるのも見えたので念には念を入れて頭を撃ち抜いた。
そして残ったのは吐き気がする腐敗臭に無様な死体だ。
「なんなんだ……ここには何があるんだ」隊長は今回の任務がキナ臭いとは思っていたが確信に変わる。
というかかなりヤバイ任務だ。
これだと研究データにしろどんなヤバイ代物か分かったもんじゃない

「なんだかゾンビ映画の世界に来た気分だ」
「あれか、前に見ていたウイルスで街まるごとゾンビだらけになった所から脱出するやつ」仲間の1人が映画好きで特にホラー映画を好む
彼が見たゾンビ映画なんかこの状況にピッタリだ。
まあその映画のゾンビは走っていたのでこれだけは似なくてよかった。
「そうそれだ。それに頭を撃ち抜かないと死なないってゾンビそのものだ」それも映画の設定だが今のゾンビはまさにそれだ。
実際射殺する際、脚や心臓を撃っても怯むだけで痛みすら感じてないようだ。
「とにかく次から構わず射殺するぞ……だが弾は無駄にするなよ」とここで働いてる人間だけで約５００人程居るらしくそれに同じ

U・B・C・SやU・S・Sの人間が警備が加わるとどれだけゾンビが居るか分からない
慎重に慎重に進み部屋の一つ一つを確認して気の遠くなるような捜索をした。
無線しても隊員からは似たようにゾンビに会うばかり歩けど歩けどゾンビだらけ正直仕切り直そうかと一旦、ベースキャンプに戻ろうと思った時、銃声が聞こえた。
生存者だ!!そう思い3人とも走る。
そして開けた場所に出ると全身黒の特殊部隊員U・S・Sが居た。
「来るな化け物!!来るな……来るなぁぁぁ!!」と一心不乱に天井に向かってサブマシンガンを乱射する。
助けなければ!!
急いで銃を構えるがU・S・S隊員は長い何かに喉元を貫かれた。
助けられなかった。
だが後悔する暇はなかった。
長い何かの正体を確認するように天井を見るとそこには全身の筋肉が剥き出しどころか脳まで剥き出しの化け物……イレギュラーミュータントのリッカーが居たのであった。
「全員構えろ!!来るぞ!!」
果たしてリッカーと言えど一般隊員は生き残れるのだろうか?

そして監視カメラでそれを見ている男は次のプランを考えていた。
「ふひひひっ……よーしリッカーは誘導出来たし頑張ってくれよ……さーて愛しのフェアリーちゃんもそろそろエントリーしてくれるかな?頑張れば助けてくれるぜ?部隊長さんよ」男は笑いが止まらない、全て金なる木だと思えばここでフェアリーを除く全てが死のうが関係ないことだ。
むしろ他の監視員は皆死ねばいい報酬は俺一人の物だ!!
ある監視員は欲張らず堅実に行きある監視員はわざとBOWを隊

員に誘導しまたある監視員はセキュリティーシステムを書き換えたりどんどん研究所は混沌に変わって行くのであった。

ファイブ＆ａｍｐ；シックス　欲望渦巻く中で２

「よっと！……オーケー、クリアだよ」とダクトから降りて確認したファーブに続いてジンクスも降りる。
「ここはどこかしら？」
「まっすぐだし第２階層だろ？それよりどうするデータ回収は？」
「表面上の救助も並行してやる必要があるでしょ？とりあえずこの施設で避難所があるからそこに行きましょ」と迷わず進む、地図は暗記してる為に場所さえ分かってればなんてことなかった。
ゾンビ等もいるがそれも問題ないが……
「栄養補給……どうする」一番の問題はこの燃費の悪い自身の身体である。
高カロリーの栄養補給用非常食は常時してるが、それで足りなくなることはかなりあり姉であるファーストですら、途中で敵の血肉を栄養補給目的で食すこともある。
いかに任務中、効率的にエネルギー消費を抑えられるかは課題である。
「目があるから辞めましょ、最低でも救助活動のあとね。言い方悪いけど最悪処分すれば」
「だよな……苦手なんだよな、効率的って。姉さんじゃないんだから」監視員の目がどこにあるか分からない現在、栄養補給目的で補食も難しい
そもそも敵地であれよこれよと無双できるのは、敵を喰らい栄養を補うことで成し得てる。
補食すらしないで維持してるタイラントの持久力は、羨ましい限りだ。
そして歩くこと１０分、第２階層の避難所までたどり着いた。
「ここであってるよね？」
「そうよ。まあノックしましょ」と少し強めにノックすると中が慌ただしくなった。

「私達はアンブレラから派遣されたU・B・C・S・よ。生きてるなら返事してください」と言うと開けてくれた。
男性2名に女性1名の研究員、計3人だ。
「おお！まさか救助部隊が来るとはそれにまさかあのフェア……」興奮のあまり口にしてはいけないことを口走ろうとしていたのでジンクスは銃口を突き付ける。
「口は災いの元です。もし不要なことを喋るなら……分かりますよね？」と3人はブンブン首を縦に振る。
一旦、扉を閉めて確認に入る。
「まず私達は救助とデータ回収を命じられています。とりあえず地上まで護衛しますがそこまでのルートを教えて下さい、護衛します。そして地上にて質問に答えてもらいます。賢いならですが？」と、素直に応じてくれたので研究員を誘導する。
「こちらジンクス、隊長応答願います……はあ……すいませんがこの施設、通信妨害の何かあるんですか？」通信しようとしたらノイズが酷かった。
「あるにはあるが……しかしあれは第3階層の設備だし」
「ハッキリ答えてよな、まあつまりその設備が誤作動して通信障害が発生っと……まあ歩きますか」と、進みながらゾンビを節約目的でナイフで倒し、そして第1階層に着いたが……
「他の隊員……運がなかったってやつだよね」
「そうね。せめてドッグタグだけでも回収しましょ」今回限りとはいえ仲間は仲間だ。
あ！でもこの人、監視員だ。
データ回収もしてまた進む途中、リッカーが現れるがこれも難なく倒しまあまた後ろで口走ろうとしていたので脅し、そして第1階層に居る研究員も助け特別苦労することなく地上まで守り抜いた。
キャンプまで戻るがまだ誰も帰還していないようだ。
そのあとは本部の人間が派遣されていたので引き渡した。
「このあとは？」
「第3階層の妨害設備は壊したいわね。そういえばファーブ、現状

の戦力は？」
「現状は２０人中１１名が死亡を確認、あと悪い意味で監視員と思われる人間がざっと８人ぐらい生き残ってるところだね。隊長は生きてるし部下も生きてるからバイオハザードに対してまぁ優秀と言える部類だよ。それとリストアップしといた注意人物は３人だね」と、ベースキャンプで監視員を洗いざらい調べ尽くしていたファーブは、ジンクスと共有する。

注意人物その１
ダルシス・クワバラス
元アメリカ空軍出身。世の中金しか信じない人間であり、当時から金次第で裏で数々の悪事に手を染めていた。だがその頃、ある正義感の強い軍人に悪事を暴露されて鉄拳制裁、裁判で死刑判決を言い渡された程の極悪人。
現在はその人物に復讐するために、軍資金及び様々な裏社会のコネクション作りに没頭中とのこと。

注意人物その２
オオカネ・ガナインダ
元米国陸軍出身で女性関係において、吐き気を催すほどの犯罪を数々犯してきた極悪人の死刑囚。
極限状態の中で女性を犯して殺す事に快楽を見いだす変態であり、現役時代に対テロ部隊のとある女性軍人に手を出そうとしたところ、返り討ちに遭い悪事も暴かれた。
現在はアンブレラのこのくそったれな環境を天国と感じてるらしく、任務中に女性を襲える機会を狙っては証拠隠滅して好成績を出してる。

注意人物その３
ニコライ・ジノビエフ
元スペツナズ出身で個々の能力では異常に高いハイスペックの持ち主。金に対する執着が高く、噂ではアンブレラ以外のクライアント

と天秤で計ってると言われてる。
非常に高いサバイバル能力があり、数々の戦場やバイオハザードから生還してきている。
「他は大したことはないわね……。はいこちらジンクス……。はい……。はい……。了解、装備を換装次第、再突入します」リストを確認中、通信が入る。
「どうした？装備って？」
「本部はもはや隠蔽しながらの作戦行動に意味はない、しかもアメリカ軍の介入が予想される。早急にデータを回収し施設を爆破せよ。新装備があと10分で届くから換装次第、再突入しろですって」
「新装備ってセカンド姉のアーマード装備……だっけ？」普段のコートとは違うバトルドレスだったはず。
「それだけ焦ってるってこと……まあいつも通りね。にしても介入とか速いと思うけど」

第5階層……
「ほっ……本当にこのデータ取りに協力すれば助けてくれるんだな？……しかしあのタイラントを起動するのは……」
「構わない……完全武装のフェアリーと対フェアリーを想定した大型タイラントこのデータは高く売れる。それにそこに転がってる無能とは違う」と、所長が命欲しさに言われるがまま、必死にプログラムを打ち込む。
側に倒れてるU．B．C．S……いや、監視員になりたくない。

男は所長を監視しながら、監視カメラを一つ一つ丁寧に観察する。
金になりそうなデータがあれば、せっせっと仕事をこなす。
「よしっ！タイラント起動に成功だ！さあわたしをこの地獄から出してくれ!!」ようやく起動に成功した所長は、やっと地獄から解放されると思い男に伝える。
だが男からの返事はない……返事は鉛弾だ。
所長は声を上げることなく死んだ。
「すまないな……情報は知る人間が少なければ少ない程、価値が上がるからな……さて残りの隊員はどう利用するか」男は動く……金の為に……